

「御苦勞様」は江戸時代には、目上の人に対して使う事が多かったとされる。だが現代では、マナーの講習などでは目上の人には使うべきでないと教える

宮田守男

ことが多い。文化庁の2024年度「国語に関する世論調査」で、配達人などのねぎらいの言葉として「ご苦勞様」を使う人が減少し、代わりに「ありがとうございます」「お疲れ様」が増えたと調査報告した。

10月7日長野市内で開催された全国日中友好協会創立75周年記念講演会に参加する。講師は「現代ビジネス」編集次長・コラムニストで活躍する近藤大介さん。著書「活中論」で「中国を活用せよ」を論じた現代中国事情に精通し、今回の「現代中国事情と日中関係

日中友好に関心を持つ

の今後」は興味深い内容がテーマで、日中関係の今後と課題を考え、講演会だった。最初の話題は高市早苗自民党総裁誕生での「靖国参拝首相」問題だ。靖国神社は明治維新以降の殉国者の霊を祭る神

社だ。太平洋戦争の指導者いわゆるA級戦犯の合祀は誰もが知るところで、吉田松陰・坂本龍馬・武市半平太らが祭神となっているが、西郷隆盛・薩摩軍のすべての兵士・上野の彰義隊・会津若松の白虎隊も祭られている

由を示す。また日本への旅行のキーワードは「20世紀に出会える旅」。「心を洗う旅だ」と。中国では現金使用や手を上げてタクシーを掴まえる光景はないとの事だ。

0万人を超え、中国人が日本人口の1%時代になるといふ。中国人が日本を目指す理由は、距離が近い・文化的に近い・物価が安い・社会が安全・規制が緩い・生活が快適・土地が買える・中国語で生活できる8つの理



近藤講師と長野県日中友好協会会長との対談。日中友好の取り組みの必要性を痛感する。

「現代中国事情と日中関係の今後」講師 近藤大介 現代ビジネス 編集次長
され中国人スタッフが急増するに違いない。これらに対応するためにも日中友好について多くの皆さんの論議を期待したいとの思いを馳せた講演会だった。(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)